■企画展２関連講演会

古墳時代の集落と豪族居館
－東日本を中心に－

菊地芳朗（福島大学行政政策学類）

はじめに

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました菊地と申します。今日はこういった機会を頂戴しありがとうございます。私は古墳時代が専門で、これまで東北を中心にさまざまな研究・調査を行ってまいりました。私の研究テーマの１つが古墳時代の村についてであり、今回の企画展に関わって、古墳時代の集落と豪族居館について話をさせていただきます。

今回のテーマの「豪族居館」とは何かといいますと、一般的には大きな前方後円墳に葬られるような人物の住んだところ、という理解かと思います。しかし､「豪族」をどう定義するかは実は非常に難しい問題で、何をもって「豪族」と呼ぶかは、研究者によって一致していません。今回は大きな前方後円墳だけでなく､古墳全般に葬られる人々の住んだ場所、あるいは活動した場所という意味で､「豪族居館」を使いたいと思います。

話の前提として、今日はどういう時間軸の中で話をするかですが、スライド２は私の暦年代や土器の位置づけを示したものです。細かな説明は省きますが、私は古墳時代を大きく早期から終末期まで５つの時期に分け、それぞれの時期が西暦で大体どのくらいにあるかを示してあります。随時この図をご覧いただきながら聞いていただければと思います。

１．群馬県黒井峯遺跡の調査成果

まず群馬県渋川市にある黒井峯遺跡の調査成果を紹介したいと思います（スライド４）。なぜ今回の講演で群馬県の遺跡を取り上げるかといいますと、ご存じの方も多いと思いますが、群馬県は村や豪族居館の研究で非常に大きな役割を果たしています。それは、古墳時代の火山噴火で村などが埋まってしまっているためです。当時の地表がいわばそのままパックされて残っているので、群馬県の古墳時代の遺跡の調査成果は、当時の村の研究や豪族居館の研究に対し非常に大きな役割を果たしているのです。

黒井峯遺跡は、６世紀の中ごろ、古墳時代後期の中ごろに廃絶した村です（スライド５）。上毛三山の一つの榛名山が黒井峯遺跡の南西にあり、これが古墳時代の中期の終わりごろと後期の中ごろに大爆発を起こし、その６世紀中ごろの大爆発による火山灰で黒井峯遺跡は埋まってしまいました。そのため、当時のさまざまなものがそのままの状態でみつかり、この遺跡は「日本のポンペイ」と呼ばれています。

黒井峯遺跡は、調査当時は子持村でしたが、今は市町村合併で渋川市になっています。関東平野北西の最奥部から少し奥の場所にあり、利根川の本流と支流の吾妻川の合流点近くにつくられた村跡です。

さらに拡大した図を見ますと（スライド６）､利根川本流と吾妻川の合流点の北の段丘上に黒井峯遺跡があります。南の対岸には、近年、甲を着た人物が火山被害に遭ってそのままの状態で見つかった金井東裏遺跡があります。ただし、金井東裏遺跡は黒井峯遺跡と同じ６世紀中ごろの遺跡ではなく、榛名山のその前の爆発、５世紀末から６世紀初め頃の爆発で被害に遭った遺跡です。ですから、黒井峯遺跡と距離は近いのですが、時間的には関係ないことになります。この金井東裏遺跡は、甲を着た人物以外にもさまざまな貴重な遺構と遺物が出ており、また、金井東裏遺跡の近くには豪族居館に関係する遺跡も見つかっていて、この辺りは榛名山の噴火によってさまざまな情報がパックされている地域です。

黒井峯遺跡は非常に重要な遺跡であることから、古津八幡山遺跡と同じく国の史跡になっています（スライド７）。基本的に開発の手は加わらず永久に保存されていくことになっているのです。

スライド８は報告書に掲載されている写真です。FPという６世紀中ごろの榛名山の爆発によって降下した火山灰が、人の背丈を超えるほどの厚さに堆積しています。その下には、FAという半世紀前の爆発の火山灰もありますので、この辺りにはものすごい厚さの火山灰が堆積し、その下から古墳時代の村が当時にかなり近い状態で見つかります。

発掘調査によって火山灰をはいでいくと、四角い

輪郭が浮かび上がってきますが（スライド９）、これが当時の火山灰によって押しつぶされた建物の跡です。ポンペイのように建物がそのまま残っているわけではありませんが、さまざまな遺構や遺物が６世紀中ごろに近い状態で出てくるわけです。

スライド10は竪穴建物です。一般に竪穴住居、あるいは竪穴式住居と言いますが、必ずしも住居として使われていたのではないため、厳密には竪穴建物、あるいは竪穴式建物と言うべきです。竪穴建物は、地面に穴を掘って出た土を建物の周囲に盛り上げ、地面より低い場所に床を設ける形式の建物なので、建物の周りにあたかもドーナツのように高まりがめぐります。それを周堤と言いますが、それによって天井までの高さが高くなります。竪穴建物は基本的に壁をつくらずに柱を立て、梁をかけて、屋根を葺く形式なので、周堤を設けることによって建物の高さを確保するということもあるわけです。

スライド10左下は群馬県高崎市かみつけの里博物館の図録からお借りした竪穴建物のイラストで、周堤が描かれています。近年、残りの良い遺跡では土が建物の屋根の上に積まれたり、土が屋根材にサンドされている事例も見つかっています。恐らく保温のためと思われますが、そうすると窓もないですし、内部は真っ暗ではないかと思うのですが、そういう形式の建物に黒井峯遺跡の人たちが住んでいたと考えられます。

スライド10右下は、黒井峯遺跡で非常に多く見つかった平地建物です。平地式というのは、地面をほぼそのまま床にしている建物のことで、なおかつ内部には柱がありません。周縁にごく細い柱のようなものが立っていた痕跡はあるのですが、それほど立派な柱ではありません。スライド10右上がその復元図です。一部に溝が掘られたものはありますが、基本的に掘り込みはなく、壁を細い柱状のものでつくって屋根をかける非常に簡素な構造です。黒井峯遺跡では平地建物の方が多く見つかっており、竪穴建物１に対し５くらいの割合であります。

平地建物の“こわい”ところは、発掘調査において地面を少し掘り過ぎてしまうと、見つけられないということです。竪穴建物は、少し地表を削ったくらいで無くなることはないのですが、平地建物は10cmも掘り下げたら遺構が無くなってしまうくらいの基礎ですので、下手をしたら発掘調査で見つけられないのです。平地建物は榛名山の噴火によって埋まった古墳時代の村でしばしば確認され、群馬県は日本列島の中で初めて古墳時代の平地建物が見つかった地域です。これが見つかるまでは竪穴建物が使われていると推定されており、平地式建物の存在は考えられていなかったため、そのような意識で各地の発掘調査は行われていませんでした。

先ほど竪穴建物１に対して平地建物が５ぐらいと申しましたが、これをふまえると他の遺跡でも本当はそのような割合なのではないかという疑念が生じます。他の県や地域でも竪穴建物は建物の主体ではないのかもしれないという疑念が、黒井峯遺跡などの調査によって研究者の間に生じたのです。実際に平地建物の方が多いのかということについては、決着がついていません。また、竪穴建物が密に見つかる遺跡もあって、そのような集落で平地建物が多数を占めると考えるのは難しいので、先ほどの建物形式の比率は群馬県の地域性である可能性も否定できません。しかし、黒井峯遺跡で普段は見つからない形式の建物が見つかったことで、古墳時代の集落研究は大きな再考を迫られるようになりました。その意味で、黒井峯遺跡は大きな成果であったと同時に、研究者にショックを与えるものでした。

黒井峯遺跡では、ほかに円形の平地建物が見つかっており、これも古墳時代ではほとんど例がないものです（スライド11左上）。この建物からは壺類が多く出土しており、調査担当者は酒づくりに利用した施設ではないかと推定しています。

それから、やはり普段は検出されない畑の跡も黒井峯遺跡では見つかっています（スライド11左下）。スライド11右上も平地の建物で、平面が長方形で長辺の一方に窪みが設けられ、家畜小屋ではないかと推定されています。近くの白井遺跡群で同じ時期の馬の蹄跡がたくさん見つかっていることから、馬などの家畜を飼っていたのではないかという推定もなされています。

スライド12左は黒井峯遺跡を上空から見たものです。畑や当時の人々が歩いた道まで見つかっています。このような道が見つかることによって、当時どのように土地が区画され利用されていたのかということも推定できます。このことは単に道の問題にとどまらず、財産がどのように管理されていたのかという方向などにも研究が進む可能性のある成果です。

スライド12右は、黒井峯遺跡の調査結果を踏まえて、村の中でどういう建物のまとまりがあるかを研究された杉井健さん作成の図です。道やさまざまな

施設を勘案しての色分けのようなまとまりがあったと推定されています。例えばⅠ・Ⅵ群というまとまりを見ると、竪穴建物は１棟しかなく、他の10数棟は全て平地建物です。一方、榛名山の６世紀中ごろの爆発は、さまざまな状況を踏まえて恐らく初夏、５月・６月に発生しただろうと推定されています。Ⅰ・Ⅵ群の１棟の竪穴建物の中には何も残っておらず、後で掘り返されたような跡もないことから、初夏のころこの建物は使われていなかったと推定されます。一方、平地建物にはそれなりに家財が残されていました。このような成果を踏まえ、竪穴建物の面積が大きいということも勘案して、竪穴建物は主に冬の住まいで、平地建物はそれ以外のスリーシーズンの住まいと推定されたのです。建物が使われていた季節を確かめる方法は考古学的には非常に難しいのですが、平地建物と竪穴建物が季節によって使い分けがされていたという可能性が黒井峯遺跡の調査やそこからのさまざまな研究から推定されることになりました。

以上のように、黒井峯遺跡の調査は、建物の構造にとどまらず、古墳時代の村の研究、さらにはそこから発展するさまざまな社会の研究に、非常に大きな影響を与えるものであったのです。

２．古墳時代の建物

スライド14左は古墳時代の非常に著名な遺物である家屋文鏡という鏡です。奈良県広陵町にある佐味田宝塚古墳という墳長110mあまりの前方後円墳（スライド14右）から出土したもので、今は宮内庁に所蔵されています。年代は４世紀中ごろ、古墳時代前期後半と推定されます。鈕を中心に放射状に４棟の建物が表現されており、４世紀ごろの建物の姿がわかる非常に貴重な資料です。

鏡に表現された建物を拡大してみますと（スライド15）、４棟それぞれ違う構造で表現されています。スライド15左上は竪穴建物と考えられるものです。壁がなく、屋根が入母屋形式のもので、床は恐らく地面より低い場所にあります。入り口の戸が支え棒によって跳ね上げられていて、中に入れる状態になっています。よく見ると屋根の上に鳥が止まっており、シンボリックな意味合いのものと思います。

スライド15右上は平地建物と考えられるものです。少し規模が大きいと考えられ、やはり入母屋形式の屋根ですが竪穴建物と違い壁が表現されています。さらに、基壇が表現され、その上に建物が立てられているのではないかと推定されます。やはりこの屋根の上にも鳥が止まっています。

スライド15左下は掘立柱建物です。穴を掘って立てた柱を基本に、床や屋根を設ける形式の建物を掘立柱建物と言います。この建物は床が地面より上にある高床式で、階段を使って上がっていくことになります。恐らくこの床下も何らかの利用があったと思います。この建物にも鳥の表現があります。

スライド15右下も掘立柱建物ですが、柱が４本表現され、スケール感が大きいですね。高床式で、欄干のような表現もあります。また､建物の前に蓋（きぬがさ）が表現されています。今でも平安貴族の儀式の再現などで貴人に従者が傘を差しかけるようすが見られますが、蓋は古墳時代の埴輪にしばしば見られるもので、その場所に身分の高い人がいることを示すシンボルになっています。これによって、この掘立柱建物は宮殿のような身分の高い人の居住を示すものと考えられます。

以上のように、家屋文鏡は単に建物が表現されているのにとどまらず、それぞれ違う構造の建物形式が表現され、さらに身分なども表示されている可能性があります。古墳時代の建物や社会をうかがう上で大変重要な資料といえ、このような資料から古墳時代の建物や身分の高い人たちの住まいを推定することが可能になっているのです。

３．古墳時代の集落

ここからは集落や豪族居館の話になります。私の研究テーマの１つが古墳時代の集落と申しましたが、私はもともと古墳や副葬遺物の研究をしていました。そういったなかで、当時の人々の住まいや村はどのようなもので、古墳に葬られる人はどのようなところに住んでいたのだろうかという疑問が湧くようになり、集落の研究を始めたのです。

このあとで話をする豪族居館の研究は、私が研究を始める以前から盛んでした。ただ、当初から、豪族居館は一般の村とは違うものであると区別されて論じられる傾向があることに疑問を感じていました。ですから、恣意的に豪族居館を抜き出すのでなく、古墳時代の村をすべて拾い上げ、その中でランクの違いがあるのか、建物の構成の違いがあるのかなどを見ることによって豪族居館を分離できたらよいという考えのもとで、集落の研究を行おうと考えました。

ただし、古墳時代集落を広く見るといっても数は

膨大ですし、地域による違いも大きいため、すべてを対象にするのは難しいと考えられましたので、普段研究対象にしている東北の検討可能な遺跡を集成し比較してみることにしました。そうしたところ、建物の数、遺構のあり方、出土遺物等から東北の古墳時代集落が５つのパターンに分けられるのではないかと考えるにいたりました。それをこれから紹介したいと思います。

山崎タイプ　１つ目は山崎タイプと名づけたもので（スライド17左）、あまり多くない数の建物からなる村の類型になります。福島県天栄村の山崎遺跡が代表例であることから命名しました。

村の研究の難しさは、黒井峯遺跡とは違い、長期間にわたって存続した村が結果として現代見つかることが普通です。そのため、遺跡には村の廃絶時には使われなくなっていた建物も含まれており、同時に存在した建物が実際にどのくらいあったのかを識別するのが非常に難しいのです。

山崎遺跡では建物が９棟見つかっていますが、出土土器を見るとこれらが同時に機能していたとは考えにくく、２～３時期におよんでいます。結果として９棟が確認されたということで、同時に存在した建物は恐らく３棟前後と考えられます。したがって、非常に小規模な村であるということが推定できるわけです。山崎タイプは古墳時代に見られる集落としては最も小規模で、なおかつ最も一般的な形の村と考えています。

スライド中の斜線が入っている遺構は、柱が存在しない建物です。柱で屋根を支えていないということですから、先ほどの黒井峯遺跡で見つかっているのと同じく、壁で屋根を支える形式の建物ではないかと考えられます。隣の建物では柱がしっかり見つかっていますので、たまたま見つかっていないのではなく、ここには柱で屋根を支える形式の竪穴建物、壁で屋根を支える形式の竪穴建物、そして掘立柱建物の３種類の建物があることがわかります。このように、同じ形式の建物だけで村が構成されているのではなく、規模の大小や建物形式に違いがあることになります。

落合タイプ　２つ目は、福島県小野町の落合遺跡で見つかった村で（スライド17中央）、山崎遺跡に比べだいぶ規模が大きい類型です。この村についても、出土遺物などから見て同時に存在していたのは恐らく10数棟と考えられます。また、やはり柱のある建物とない建物があり、長方形の建物もあることから、村の建物に構造・形・大きさの違いがあることがわかります。なお、この遺跡では掘立柱建物は見つかっていません。４世紀、古墳時代前期の比較的多くの建物からなる村は、決して多数存在するわけではありませんが、広く分布しています。

樋渡台畑タイプ　３つ目は、福島県会津坂下町の樋渡台畑遺跡にみられる類型です（スライド17右）。この遺跡の大きな特徴は、西側に堀が掘られていることです。段丘の縁辺に営まれた村なのですが、堀によって段丘から切り離され、なおかつ堀には張り出しが設けられ、城のような構造をもっています。掘立柱建物はないのですが、内部にはかなり多くの数の竪穴建物が見つかっており、柱穴のある建物とない建物がありますし、規模の違いもかなりはっきりしています。

遺跡の中の特に大きな建物跡からは、首飾りや腕輪、須恵器の器台や飾りのある壺など、さまざまなものが出土しています。それらは古墳の副葬品になっても不思議でないものです。このように樋渡台畑遺跡は、10棟以内ほどの建物からなる集落ですが、単純に比較的小規模な村とは言えず、比較的高い身分の人々が住んだ村といえます。

古屋敷タイプ　４つ目は、福島県喜多方市の古屋敷遺跡に代表される類型です（スライド18左）。この遺跡はその重要性から国史跡になりました。スライド中のスケールが100mなので、これまで見てきた類型と規模が大きく違います。最も注目されるのは、二重の堀で囲んだ方形区画が形成される点で、堀は単に方形であるだけでなく突出部が各辺につくられています。さらに、堀の内側には柵が回っています。

これがただならぬ遺跡だということは直ちにわかりますが、発掘調査の結果、区画の内部には比較的小規模な竪穴が見つかっただけでした。この点は古屋敷遺跡の悩ましいところですが、それにしても、これほどの遺跡が一般農民の村とは言えないと思います。

一方、堀の外側の北西側で掘立柱建物群が見つかりました。建物はコの字状に配置され、その中のいくつかは倉庫として使われたと考えられます。また、ここは低丘陵上に営まれた遺跡なのですが、丘陵の落ち際で大きな穴が見つかり、そこではマツリに使ったさまざまな遺物がまとめて捨てられていました。ここで何らかの祭祀が行われていたことがわかります。さらに、丘陵全体を外堀が囲んでいた可能性があります。

古屋敷遺跡では史跡指定に先立つ確認調査の際、二重の方形区画の北側に２号方形区画が見つかり、同じ性格のものではないかと考えられました。しかし、近年の確認調査によって２号方形区画は中世の遺構で、古墳時代でない可能性も出てきています。

このように、この古屋敷遺跡は規模が大きく、さまざまな性格の建物や施設が丘陵の南半に配置されていることがわかり、非常に注目すべき内容をもった遺跡であるといえます。また、古屋敷遺跡ほどはっきりとはわからないものの、このような大きな堀で囲まれた区画施設をもつ遺跡が、数は少ないのですが東北あるいは全国にいくつか見つかっています。

上ノ代タイプ　最後の５つ目は、上ノ代タイプと名前をつけた類型で、福島県須賀川市の上ノ代遺跡を標識にしています(スライド18右)。ここは道路を通すための調査によって確認されたため、道路幅の部分しかわかっていないのですが、方形の堀で囲まれた区画が見つかりました。堀の外側に竪穴建物がいくつかある一方、区画の内部については全体の半分弱しか調査されていません。ただし、区画内部で１棟見つかっている竪穴建物は堀とは別の時期のもので、そうなると方形区画の中には何もないことになってしまいます。

堀の中からは、マツリに使ったと考えられる石製模造品や土器などが大量に出土しており、この施設が何らかの目的で使われたものであることは間違いないのですが、先ほどの古屋敷遺跡のように、さまざまな機能や役割が与えられたとは考えにくく、今のところマツリが行われたことはわかるものの、それ以外に何が行われたかがよくわからない類型ということになります。何故このような大規模な堀や柵を巡らしたのか、そして内部が何に使われたかはっきりわからない遺跡が、数は少ないですがいくつか確認されています。あるいは古屋敷遺跡のような遺跡かもしれませんが、現時点では性格がよくわからないため区別しておいたほうが良いだろうと考えました。

各類型の性格　以上のように、東北の古墳時代の村を見ると、山崎タイプから上ノ代タイプまで、大きく５つの集落の類型が把握できることがわかりました。

それぞれの類型の性格についてですが、古屋敷タイプは大規模ですし、いろいろな施設や遺物がそろっていることから、まさに典型的な豪族居館で、このようなところに古墳に葬られる人が住んだのだろうと考えられます。しかし、古墳に葬られた人々が全員このような場所に住んでいたのかということになると疑問に思います。というのも、古屋敷タイプのように大規模な区画やさまざまな機能を持った建物をもつ遺跡は、全国的に見ても非常に限定されます。しかも古屋敷遺跡は５世紀、古墳時代中期後半の遺跡ですが、全国的に見てこのタイプの遺跡はほぼそのころに集中しています。

そのようにして見ると、古屋敷遺跡は確かに大規模な古墳に葬られるような人物が拠点にした場所だったと思いますが、古墳時代前期でも後期でも同じような遺跡が存在するかというと、そうではありません。このような例はむしろ中期のあり方であって、そのまま全国やすべての時期に当てはめるのはかえって危険であると考えるようになっています。

一方、樋渡台畑タイプや落合タイプのように堀で方形に区画されていなくても、大規模であったり、質の高い施設や遺物をもつ遺跡も、古墳に葬られる人が拠点にしていたのではないかと考えています。樋渡台畑遺跡は西側に堀がありますが全体を囲っていませんし、中に宮殿のような建物があるわけでもありません。しかし、両タイプのように多くの人々が居住し、古墳の副葬品になるような器物をもっている村は、決して多くありません。ですから、このような類型も古墳との対応を考えなければならないと思います。さすがに山崎タイプは小規模で、遺跡数も非常に多いので、このタイプにまで古墳に葬られる人が住んだと考えることは難しいですが、落合タイプや樋渡台畑タイプについては、十分に可能性があると考えています。

上ノ代タイプについてはよくわからないところもありますが、あれだけ大規模な土木事業が行われている遺跡なので、やはり一般農民の村ではないだろうということは言えます。いわゆる豪族のような身分の高い人々が住んでいたのかということについては―そもそも建物が見つかっていないので住まいということも言えないわけですが―身分の高い人々が何らかの活動に使った場所とは言えるだろうと考えています。

４．豪族居館（首長居館）

群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡の調査成果　次に紹介するのは、非常に有名でまさに豪族居館の代表と言えるもので、群馬県高崎市にある三ツ寺Ⅰという遺跡です

（スライド20）。豪族居館という言葉を今回私は使っておりますが、「首長居館」と言う場合もあります。意味的にはさほど違いはありません。

三ツ寺Ⅰ遺跡は、上越新幹線の工事に先立つ発掘調査で見つかったものですが、それ以前からここは周りの水田より一段高く、周辺の住民から「島畑」と呼ばれていたそうです。ただならぬ場所ということが調査前からある程度予想されていたところに、発掘調査によってまさに豪族居館が見つかったのです。

調査は基本的に新幹線の路線幅しか行われていませんが、発掘調査が始まると、古屋敷遺跡で見たような深い堀で方形に区画され、張り出しがあって、内部では非常に大きな建物なども見つかりました（スライド21左）。スライド21右上のような堀や古墳の葺石にも似た石を貼った部分など、非常に立派な遺構も出てきました。そして、堀の内側には三重の柵が巡っていました（スライド21右下）。張り出し部では、その張り出しに合わせるように柵も張り出していました。規模も非常に大きく、方形区画の一辺は90mほどです。

方形区画の内部では、１号掘立柱建物と名づけられた13.5m×11.7mで面積50坪にもなる平地式建物が見つかっています（スライド22）。それほど大規模な建物が柵に沿って整然とつくられていました。建物がどのような上部構造だったかはよくわかりませんが、これだけ内部に広い空間がありますので、高床倉庫のようなものではなく、有力者の何らかの活動が行われた場所と思われます。スライド22右上のように、高床ではなく平地式の大きな建物として推定復元されています。

また、方形区画内部のちょうど中央を多重に区画する柵が通っています（スライド23上）。この柵に沿って石敷きの遺構があり、そこからはさまざまな祭祀の道具も見つかっていて、木の桶のようなものが置かれていたと推定されています。さらに、もう一つ同じような石敷き遺構が南側で見つかっており、水路となる溝を外から渡して、石敷き遺構に水を流し込み、さらに南側に流すというように、水を使った何らかの祭祀行為が行われた場所と考えられます。

この区画からは井戸が見つかっていて、その内部から太い杉の丸太をくりぬいた井戸枠も出土しています（スライド23下）。この井戸は単に水を得るためのものではなく、聖なる井戸として何らかのマツリのために使われたものと推定されています。この井戸は１号掘立柱建物のすぐ脇にあって、祭祀空間をなしているものと考えられます。

堀の内部からは非常に大量の遺物が出土しました（スライド24）。注目されるのは、金属を溶かすために使った羽口という道具があり、銅が付着していることから銅を加工していたと推測されることです。スライド24左上の右側は坩堝の破片で、銅を溶かして何らかの型に流し込むためのもので、スライド24左下は鍛冶作業によって出た鉄の遺物です。このように、三ツ寺Ⅰ遺跡では方形区画内部で金属加工が行われていたと考えられます。また、祭祀のために用いられた石製模造品も出土しており（スライド24右）、祭祀行為もこの中で行われていることがわかります。

こういった生産に関わるものや祭祀に関わるもの、それ以外にも木製品も多数出土しており、その中には実用的なものや祭祀的なものがあったりと実にさまざまです。これらのことから、三ツ寺Ⅰ遺跡では、生産や祭祀が広く行われていたことがわかります。

三ツ寺Ⅰ遺跡では全体の４分の１くらいしか発掘調査されていないにもかかわらず、これだけのさまざまな遺構や遺物が見つかっています。他に何があるのかはわからないため、いろいろな推定がなされています。未発掘空間が全て空き地ということはないと思うのですが、大きな建物が他にもあるのか、あるいは古屋敷遺跡のような小規模な竪穴建物しかないのか、それについてはまだよくわからないのです。

三ツ寺Ⅰ遺跡は榛名山の南斜面に位置しているため、堀は南側の水がたまりやすいところに大きく掘られていました。ただし北側は標高が高く水をためられないだろうということで、最近の復元では細い川だったのではないかと推定されています。スライド25右は、高崎市かみつけの里博物館にある三ツ寺Ⅰ遺跡の復元模型で、東側の未発掘空間には倉庫があり、１号掘立柱建物の南側では人々が何らかの儀式を行っているという復元がされています。その可能性は十分あると思いますが、絶対そうかと問われると、絶対とは言い切れません。

三ツ寺Ⅰ遺跡の発掘以前は、前方後円墳に葬られる人々がどのようなところに住んでいたのかという問題は、家形埴輪の研究から進められていたのですが、三ツ寺Ⅰ遺跡の発掘調査によって、初めて遺跡

として確認されることになりました。そして、それは誰もがイメージする豪族居館にぴたり一致する非常に立派な遺跡であったため、豪族居館の典型として、大きな反響をもって受け止められることになりました。

さらに三ツ寺Ⅰ遺跡の近くには、ほぼ同じ時期の５世紀後半から６世紀初めごろにかけて、保渡田古墳群と呼ばれる100mほどの大きさの３基の前方後円墳がつくられました(スライド26)。井出二子山古墳、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳で、コの字に並ぶように大型前方後円墳があります。ここは現在史跡公園になっており、保渡田八幡塚古墳と井出二子山古墳は整備されて見学することができます。保渡田古墳群は、三ツ寺Ⅰ遺跡の北西１kmほどのところにあります(スライド27)。歩いて行けるほどの距離に同時期の大型前方後円墳があり、まさに絵に描いたような対応関係が見られるということで、これこそが豪族居館のあり方なのだと誰もが思うことになりました。

三ツ寺Ⅰ遺跡の位置づけ　先ほど私の研究成果で古屋敷タイプを紹介しましたが、これが三ツ寺Ⅰ遺跡に近いと言ったら少し言いすぎかもしれませんが、かなり似た内容をもった遺跡であると言えると思います。近年、古屋敷遺跡から北西に２kmほどのところにあるほぼ同時期の灰塚山古墳という前方後円墳が東北学院大学によって発掘調査され、古屋敷遺跡と対応すると言えるようになってきました。

このような非常に典型的なパターンが他にもあるのかということについてですが、三ツ寺Ⅰ遺跡や古屋敷遺跡に似たような内容をもつ遺跡は、先述のとおりそれほど確認されていません。もちろんまだ見つかっていないだけということもあり得るわけですが、全国どこでもあるわけではありませんし、見つかっている場合でも古墳時代中期にほぼ限定されます。古墳時代前期で三ツ寺Ⅰ遺跡のような内容をもった遺跡はゼロとは言いませんが非常に少ないのです。このように、三ツ寺Ⅰ遺跡と保渡田古墳群のような見事な対応関係は、決して古墳時代の全ての時期にどこの地域でも見られるのではないということが次第にわかってきました。

保渡田古墳群の復元整備事業を担当され、古津八幡山遺跡の調査指導部会の委員でもあった明治大学の若狭徹先生は、三ツ寺Ⅰ遺跡が豪族の住まいと言えるのかということについて、否定はしておられませんが、単に住まいにしていた場所というより、祭祀に代表される首長が活動を行う場なのではないかと推定しておられます。私も三ツ寺Ⅰ遺跡のような遺跡は、どこの地域のどの時期にでもあるのではなく、古墳時代中期に限定される特徴的な首長の活動拠点であると考えています。若狭先生に近い考えを持っているということです。

さまざまな居館　このような豪族居館の研究は、新潟大学の橋本博文先生が第一人者で、先駆的な研究を30年以上前から行っておられます。スライド28は橋本先生のご研究の成果をお借りしたものですが、居館にはいろいろな形や大きさがあることがわかります。三ツ寺Ⅰ遺跡は確かに規模が大きく、大きな前方後円墳に対応するだろうということが言えるわけです。しかし、堀をめぐらす遺跡や、居館と推定される遺跡でもやや小規模なもの、一辺数十mぐらいしかないより小さいものもあり、決してひとつの種類、ひとつの大きさでないことが橋本先生などのご研究でわかっています。

そして、やはり注目されるのは、近畿中央部の巨大前方後円墳に葬られる人々がどのようなところに住んでいたのかという問題です。奈良盆地や大阪平野など近畿中央部では、三ツ寺のような遺跡がまだ見つかっていません。ただし、まったく見つかっていないのではなく、大阪城のすぐ南にある法円坂遺跡では巨大倉庫群が見つかっています。あるいは和歌山市の鳴滝遺跡でも巨大倉庫群が見つかっています。これらは一人の首長が自分の消費分だけ蓄えていた倉庫ではないわけです。こういった断片的な、しかもただものでないと考えられる遺跡が近畿の各地で見つかっているのですが、三ツ寺Ⅰ遺跡のように大きな堀で区画され、内部にさまざまな施設が集まっている遺跡は見つかっていないのです。そうしてみると、三ツ寺Ⅰ遺跡が実は特殊なのではないかということが考えられるようになってくるのです。いずれにせよ、居館にはさまざまな形、大きさ、内容があり、それぞれのケースに則して考えていかなければいけません。

スライド28右は、橋本先生がおつくりになった豪族居館―先生は豪族居館とは言いませんが―の規模の差と古墳の対応関係を示した図です。ピラミッド型の図式を橋本先生は描いておられ、その頂点に立つのはもちろん巨大前方後円墳で、それに対応する遺跡は、先ほどの鳴滝遺跡や法円坂遺跡のような大規模倉庫群をもち、祭りの場や政治の場を備えるものです。

このように、豪族居館と総称されるものにはランクの差があって、巨大前方後円墳から小型の円墳、方墳に対応するくらいまでのあり方があるのではないかという推定を橋本先生はしています。一方で、図のように整然と対応するとは限らないということも書いておられますが、大きく見ると確かにこういった階層性や建物の構成の違いはあるだろうと私も思います。例えば、私が樋渡台畑タイプとした遺跡は、橋本先生の図の２段目や３段目に該当し、三ツ寺Ⅰや古屋敷は図の２段目ぐらいに対応するだろうと思います。どこまで整然と対応しているかはわかりませんが、村の内容と古墳との対応が全国的な傾向として認められるだろうと考えているわけです。村全体や遺跡全体が発掘されることはなかなかありませんので、内部が全てわかる遺跡は決して多くありませんが、このような対応関係を各地域で考えていかなければならないと考えているところです。

５．新潟の豪族居館と古墳

では、ご当地新潟ではどうなのだろうかということをみてみたいと思います。

今回の企画展でも取り上げられていますが、直径60mと新潟県で最大の古墳である新潟市秋葉区古津八幡山古墳が新潟平野を望む丘陵頂部にあり、その北西麓にある舟戸遺跡が同じころの遺跡であると以前から指摘されています(スライド30左)。果たしてどうなのだろうかというのが私も気になりますし、皆さんも関心のあるところではないかと思います。

この舟戸遺跡は全面が調査されたわけではなく、非常に部分的な調査がこれまで積み重ねられているものです。スライド30右は弥生の丘展示館のパンフレットからお借りした図ですが、第２次調査で１辺が7.5mほどと比較的大きな竪穴建物が見つかっています。同じスライドにグラフがありますが、新潟県内で見つかっている古墳時代中期から後期の竪穴建物の中でも舟戸遺跡の竪穴建物がかなり上位に位置することがわかります。さらに、同じ時期と考えられる柵の跡なども見つかり、大量の土器が出土しているということで、ここが古津八幡山古墳に対応する、豪族居館の一部なのではないかという推定がされているわけです。

この２次調査１号建物に古津八幡山古墳の主が住んでいたのかということについて、私としてはその可能性は十分ある一方で、そう簡単には言えないとも思っております。この舟戸遺跡の周囲には、塩辛遺跡、森田遺跡、高矢Ｃ遺跡など、少し時間幅もありますが古墳時代の村がいくつか展開しています。舟戸遺跡の北側には川が流れており、内水面を通ってきた終着点の舟戸遺跡付近に船着場、港があると推定されます。舟戸遺跡も含め、この地域一帯が比較的大きな集落で、その中に古津八幡山古墳に葬られた人物が居住あるいは活動の拠点にした場所がある可能性は非常に高いと考えています。一方で、舟戸遺跡２次調査区そのものと直ちに言えるかというと、そう簡単ではないと思っています。スライド31は舟戸遺跡１号建物の写真です。

新潟の豪族居館の候補として他にどういうものがあるか見てみますと、古屋敷遺跡や三ツ寺Ⅰ遺跡のように、しっかりとした堀で囲まれ方形区画をもつ遺跡はまだ見つかっていないようです。ただし、ないとは簡単に言えず、今後見つかる可能性も十分あると思います。一方、旧巻町の新潟市西蒲区御井戸遺跡は、ごく一部しか発掘調査されていないのですが、大量の土器や祭祀に使われた石製模造品、あるいは木製の祭祀具や建築材など、かなり高い地位の人物の存在を感じさせる遺物が出土しており、豪族居館の有力な候補になると考えています。旧巻町周辺には、山谷古墳をはじめとする古墳時代前期から中期の古墳がつくられています。御井戸遺跡からは幅広い時期の遺物が出てきているので、どの時期の古墳に対応するのか簡単には言えませんが、今後その辺がさらに追及されていくと思います。このように、舟戸遺跡や御井戸遺跡は、豪族居館そのものとは直ちに言えないにしても、その有力な候補になることは間違いないと考えているところです。

さらに、胎内市の城の山古墳や、新潟市東区の牡丹山諏訪神社古墳のような有力な古墳が新潟県内で近年確認されていますが、まだそれに対応する村や居館がはっきりとわかっていませんので、これらについても今後追及されていくものと思います。ただし、三ツ寺Ⅰ遺跡のようなものが見つかる可能性はあまり高くないかもしれないと考えています。

おわりに

今までいろいろな話をしてきましたが、最後に、集落や豪族居館の研究から何が追及できるのかということをあげて、終わりにしたいと思います（スライド32)。

集落と豪族居館で見つかる遺物や遺構から、建物や道具がどのように使われ、そして、どのように変

わったのかということがわかります。当時の衣食住や生業も判明します。また、村跡の研究から判明することですが、黒井峯遺跡のように道が見つかったり、建物のまとまりが把握できると、集落の中の住民同士がどのような関係だったのか、身分の差があったのかなどにも研究を進めていくことができます。さらには、村と村の間にどのような関係があったのか、まったく関係がないのか、あるいはどこかの村が頂点にあってそれに従属する村があったのかなど、そういったことがわかってくる可能性があると思います。

それから、古屋敷タイプを頂点として樋渡台畑タイプと落合タイプが古墳に葬られる人々が居住した村の可能性があると申し上げましたが、当時の身分関係、階層関係、その中で古墳に葬られる人というのはどういうところに住んでいたのか、ということなども、集落の研究をする中で追及することができると考えております。さらに研究が進めば、婚姻関係、家族制度、財産がどのように管理されていたか、農業経営はどのように行われたのかなど、集落の研究は色々な方面に発展可能な分野といえます。単に古墳に葬られた人はどのようなところに住んでいたのかということだけでなく、当時の社会のあり方をうかがうことができる可能性をもっているのです。

古墳時代の研究というと、古墳とその副葬品をはじめとする遺物の研究が古くから行われているわけですが、そういった研究だけでは、今あげたようなことを知るのは困難です。古墳の研究はこれからも重視され、私も続けていくと思いますが、それだけで古墳時代が全てわかることはないだろうと思います。当時の高い身分の人が葬られた古墳の研究は大事ですが、それとともに一般の人々や中間的な身分の人々が住んだ集落の研究をしていくことでわかる部分がかなりあるだろうと思っています。まさに車の両輪のように、古墳と集落の研究を行っていかなければならないと考えているところです。

今日の私の話はこれで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

古墳時代の集落と豪族居館
―東日本を中心に―

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展「豪族居館」講演会
2018年10月14日

福島大学　菊地 芳朗

スライド1

はじめに

◆今回の話の内容

◆時間軸（菊地2010より）

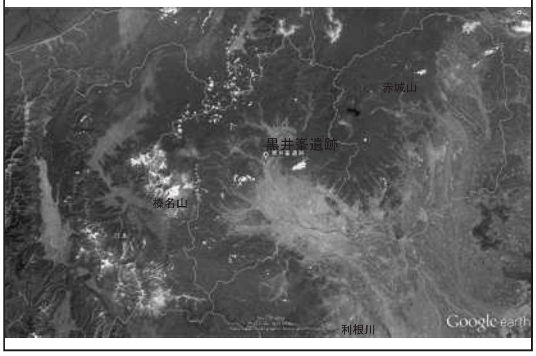
本書でもちいる時期区分・暦年代と土師器編年の対照

時代	弥生時代	古墳時代					奈良時代
時期		早期	前期	中期	後期	終末期	
年代	AD 200	300	400	500	600	700	
須恵器				TK73 TK216 TK208 TK23 TK47	MT15 TK10 TK43 TK209	飛鳥様式	
土師器			塩釜	南小泉 引田 [illegible]	舞台	栗囲	
古墳			古墳1期	古墳2期 古墳3期	古墳4期	古墳5期	

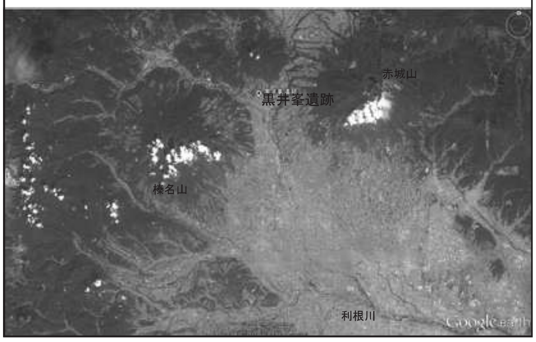
スライド2

1. 群馬県黒井峯遺跡の調査成果

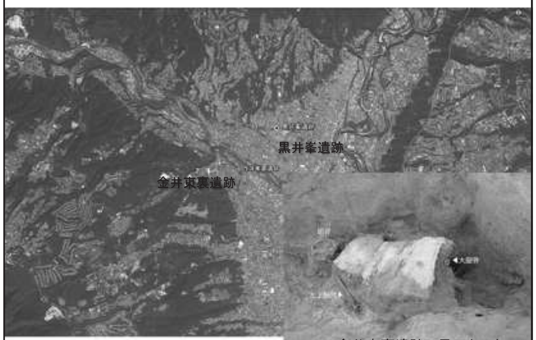
スライド3



スライド4



スライド5



金井東裏遺跡で見つかった
よろい（挂甲）を着た遺体

スライド6

黒井峯遺跡と榛名山

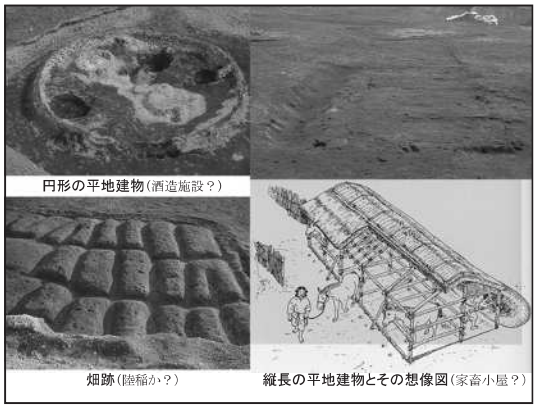
スライド7

黒井峯遺跡に堆積する火山灰（FP；6世紀中ごろに降下）

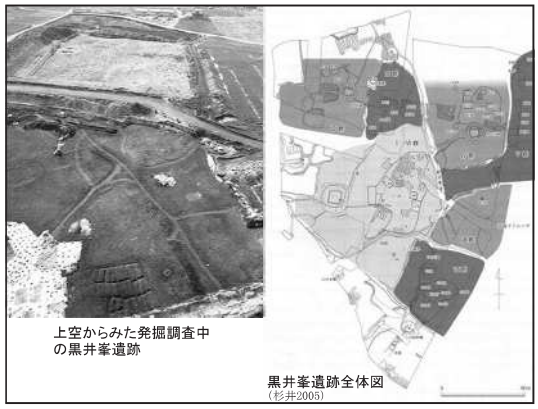
スライド8

スライド 9

スライド10



スライド11



スライド12

2. 古墳時代の建物

スライド13

家屋文鏡にみえる建物(奈良県佐味田宝塚古墳出土　4世紀)

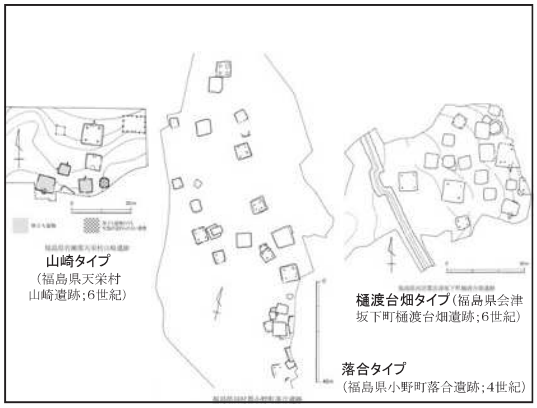
スライド14

家屋文鏡にみえる建物(奈良県佐味田宝塚古墳出土　4世紀)

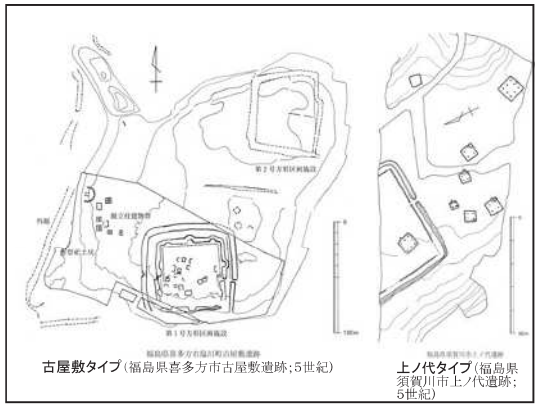
スライド15

3. 古墳時代の集落

スライド16



スライド17



スライド18

4. 豪族居館（首長居館）
群馬県高崎三ツ寺Ⅰ遺跡の成果

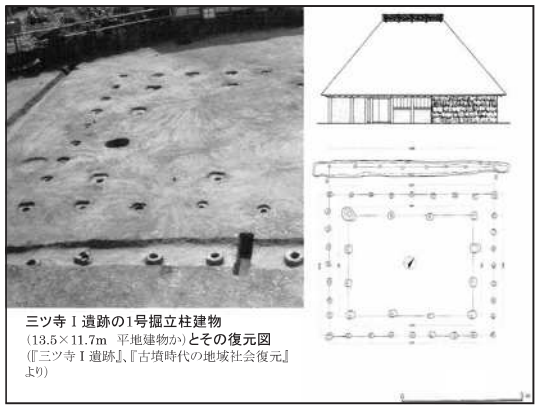
スライド19

発掘調査中の三ツ寺Ⅰ遺跡（『三ツ寺Ⅰ遺跡』1988より）

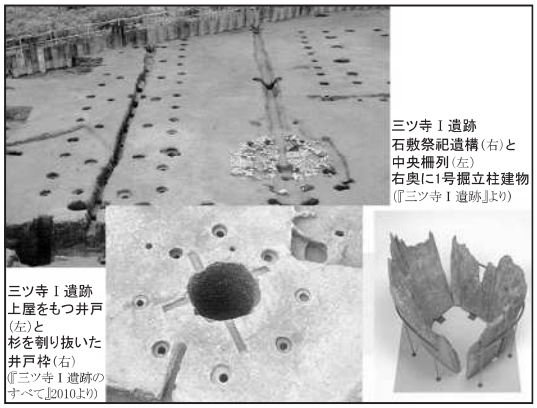
スライド20

三ツ寺Ⅰ遺跡の検出遺構
（『古墳時代の地域社会復元』2004より）
張り出し部と内側を
通る三重の柵列
（『三ツ寺Ⅰ遺跡』より）

スライド21


三ツ寺Ⅰ遺跡の1号掘立柱建物
（13.5×11.7m　平地建物か）とその復元図
（『三ツ寺Ⅰ遺跡』、『古墳時代の地域社会復元』
より）

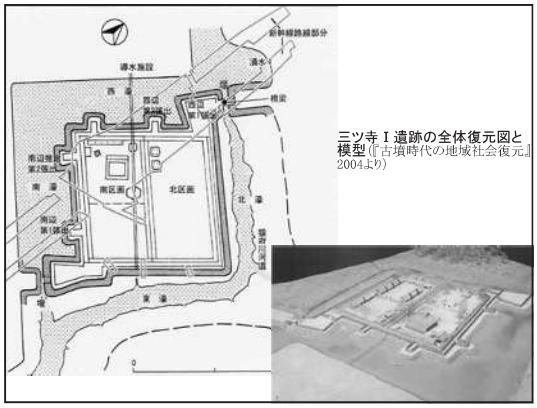
スライド22


三ツ寺Ⅰ遺跡
石敷祭祀遺構（右）と
中央柵列（左）
右奥に1号掘立柱建物
（『三ツ寺Ⅰ遺跡』より）
三ツ寺Ⅰ遺跡
上屋をもつ井戸
（左）と
杉を割り抜いた
井戸枠（右）
（『三ツ寺Ⅰ遺跡のすべて』2010より）

スライド23

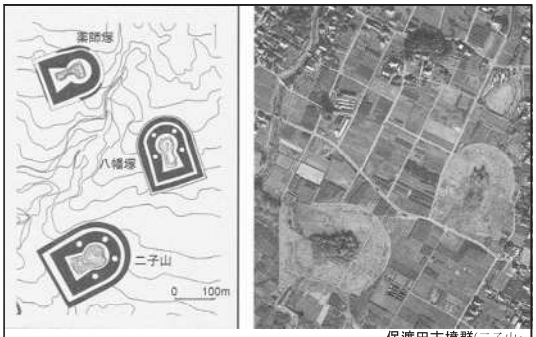
三ツ寺Ⅰ遺跡出土の羽口・坩堝・鉄滓（青銅器と鉄器の製造を示す。『三ツ寺Ⅰ遺跡のすべて』より）
三ツ寺Ⅰ遺跡出土の石製模造品
（『三ツ寺Ⅰ遺跡』より）

スライド24



三ツ寺Ⅰ遺跡の全体復元図と模型(『古墳時代の地域社会復元』2004より)

スライド25

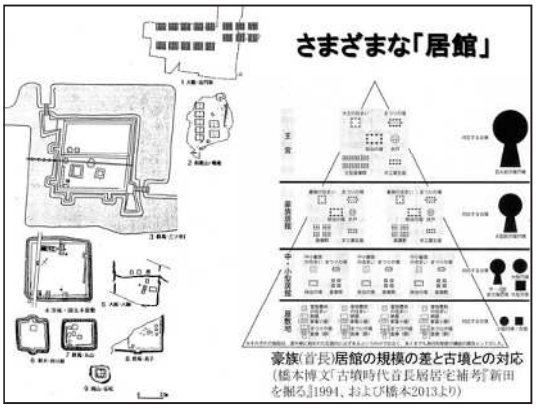


保渡田古墳群(二子山・八幡塚・薬師塚)と三ツ寺Ⅰ遺跡(『古墳時代の地域社会復元』より)

スライド26

保渡田古墳群(二子山・八幡塚・薬師塚)と三ツ寺Ⅰ遺跡(『古墳時代の地域社会復元』より)

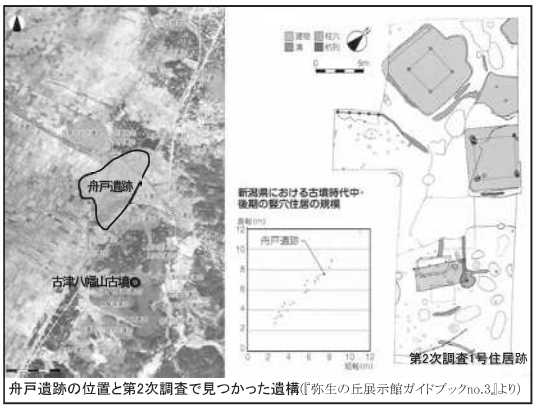
スライド27



スライド28

5. 新潟の豪族居館と古墳

スライド29



舟戸遺跡の位置と第2次調査で見つかった遺構(『弥生の丘展示館ガイドブックno.3』より)

スライド30

舟戸遺跡の位置と第2次調査で見つかった遺構(『弥生の丘展示館ガイドブックno.3』より)

スライド31

おわりに

◆集落・居館研究から何が追究できるのか

- 建物や道具の使い方・変化。
- 当時の衣食住や生業(なりわい)の実態。
- 集落の住人どうしの関係。
- 集落間の関係。
- 階層関係(古墳に葬られる人とは?)。
- 婚姻関係、家族制度、財産所有、農業経営・・・・

古墳とその遺物の研究だけで、これらを知ることは困難

スライド32

図・写真の出典

スライド２：菊地芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
スライド４、５、６左上：Googleマップをもとに作成
スライド６右下：徳江秀夫2013「これが“甲を着た古墳人”だ」『埋文群馬』No.57　公財群馬県埋蔵文化財調査事業団
スライド７：著者撮影
スライド８、９、10左上・右下、11左下：石井克己編1990『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会
スライド10左下・右上、11左上・右上・右下：若狭　徹1999『よみがえる五世紀の世界』かみつけの里博物館
スライド12左：洞口正史編1990『火の山はるな　火山噴火と黒井峯村のくらし』群馬県立歴史博物館
スライド12右：杉井　健2005「古墳時代集落研究序論」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
スライド14左：白石太一郎編1990『古墳時代の工芸』講談社
スライド14右上：著者撮影
スライド14右下：佐味田宝塚古墳現地案内板（河合町・河合町教育委員会作成）を著者撮影
スライド15：白石太一郎編1990『古墳時代の工芸』講談社
スライド17、18：菊地芳朗2001「東北地方の古墳時代集落－その構造と特質－」『考古学研究』第47巻第４号　考古学研究会
スライド20、21右、22左、23上・24右：下城　正・女屋和志雄1988『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県教育委員会
スライド21左、22右、25、26、27：若狭　徹2004『古墳時代の地域社会復元　三ツ寺Ⅰ遺跡』新泉社
スライド23下・24左：内田真澄2010『豪族居館三ツ寺Ⅰ遺跡のすべて～出土品を総覧する～』かみつけの里博物館
スライド28左：橋本博文1994「古墳時代首長層居宅補考」『新田を掘る』木暮仁一先生古稀記念論集刊行会
スライド28右：橋本博文2013「古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学』６　同成社
スライド30・31：新潟市文化財センター2013『弥生の丘展示館ガイドブック』No.3